

# 『往生論註』の菩提心について

服部純雄

## はじめに

曇鸞は『往生論註』（以下『論註』と記す）巻下、善巧摂化において『無量寿経』巻下、三輩往生文に基づき案<sup>スル</sup>ニ王舍城所説無量寿経<sup>ニ</sup>、三輩生<sup>ノ</sup>、中雖<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>優劣<sup>一</sup>、莫<sup>シ</sup>不<sup>ニ</sup>皆發<sup>ニ</sup>無上菩提之心<sup>一</sup>。（中略）是<sup>ノ</sup>故願<sup>ス</sup>生<sup>セント</sup>彼安樂淨土<sup>ニ</sup>者、要<sup>ス</sup>發<sup>ニ</sup>無上菩提心<sup>ニ</sup>也<sup>①</sup>。

と述べている。この文は浄土への願生に際して願生者に發菩提心を要求しているようであるが、はたしてかかる記述をした曇鸞の意図は何であつたのだろうか。この問題に対し拙論では、『論註』が願生者をいかなる者を中心に捕えようとしているかを明らかにし、これに基づき善巧摂化をいかに理解すべきかを考え、私見を述べてみたい。

## 一

善巧摂化に依用された『無量寿経』巻下、三輩往生文とは以下のごとくである。

仏告<sup>ハ</sup>阿難<sup>ニ</sup>。十方世界<sup>ノ</sup>諸天人民<sup>、</sup>其<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>至心<sup>ニ</sup>願<sup>ス</sup>生<sup>セント</sup>彼<sup>ノ</sup>国<sup>一</sup>。凡<sup>ソ</sup>有<sup>ニ</sup>三輩<sup>一</sup>。

其<sup>ノ</sup>上輩<sup>者、</sup>捨<sup>テ</sup>家<sup>ヲ</sup>棄<sup>テ</sup>欲<sup>ヲ</sup>而作<sup>ニ</sup>沙門<sup>一</sup>、發<sup>シ</sup>菩提心<sup>一</sup>、一向專念<sup>ニ</sup>無量寿仏<sup>一</sup>、修<sup>ミ</sup>諸<sup>ノ</sup>功德<sup>一</sup>、願<sup>ス</sup>生<sup>セント</sup>彼<sup>ノ</sup>国<sup>一</sup>。此<sup>レ</sup>等、

衆生、(中略)即隨<sup>テ</sup>彼<sup>ニ</sup>仏<sup>ニ</sup>往<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>、(中略)住<sup>ミ</sup>不退<sup>ニ</sup>転<sup>ス</sup>、智慧勇猛神通自在<sup>ナリ</sup>。(中略)其<sup>ノ</sup>有<sup>ニ</sup>衆生<sup>ニ</sup>、欲<sup>ハ</sup>於<sup>ニ</sup>今世<sup>ニ</sup>見<sup>ル</sup>中<sup>ニ</sup>無量壽<sup>ノ</sup>仏<sup>ヲ</sup>、応<sup>テ</sup>發<sup>シ</sup>無上<sup>ノ</sup>菩提<sup>ノ</sup>之心<sup>ヲ</sup>、修<sup>シ</sup>行<sup>ヲ</sup>、功德<sup>ヲ</sup>願<sup>ス</sup>生<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>。

仏語<sup>ニ</sup>阿難<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>中輩<sup>ノ</sup>者<sup>ハ</sup>、十方世界<sup>ノ</sup>諸天人民<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>有<sup>ニ</sup>至心<sup>ニ</sup>願<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>、(中略)當<sup>ニ</sup>發<sup>シ</sup>無上<sup>ノ</sup>菩提<sup>ノ</sup>之心<sup>ヲ</sup>一向專念<sup>ニ</sup>無量壽<sup>ノ</sup>仏<sup>ヲ</sup>、多少修<sup>シ</sup>善<sup>ヲ</sup>奉<sup>シ</sup>持<sup>シ</sup>齋戒<sup>ヲ</sup>起<sup>シ</sup>立<sup>シ</sup>塔像<sup>ヲ</sup>、(中略)以此廻向<sup>シ</sup>願<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>、(中略)即隨<sup>テ</sup>化<sup>シ</sup>往<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>住<sup>ミ</sup>不退<sup>ニ</sup>転<sup>ス</sup>功德智慧<sup>ヲ</sup>次<sup>ニ</sup>如<sup>シ</sup>上輩<sup>ノ</sup>者<sup>ニ</sup>也。

仏告<sup>ニ</sup>阿難<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>下輩<sup>ノ</sup>者<sup>ハ</sup>、十方世界<sup>ノ</sup>諸天人民<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>有<sup>ニ</sup>至心<sup>ニ</sup>欲<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>、(中略)當<sup>ニ</sup>發<sup>シ</sup>無上<sup>ノ</sup>菩提<sup>ノ</sup>之心<sup>ヲ</sup>一向專意<sup>ニ</sup>乃至十念念<sup>シ</sup>無量壽<sup>ノ</sup>仏<sup>ヲ</sup>願<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>、若聞<sup>ニ</sup>深法<sup>ヲ</sup>歡喜信樂<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>生<sup>シ</sup>疑惑<sup>ヲ</sup>乃至一念念<sup>シ</sup>於<sup>ニ</sup>彼<sup>ノ</sup>仏<sup>ニ</sup>以至誠心<sup>ニ</sup>願<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>、(中略)亦得<sup>ニ</sup>往<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>功德智慧<sup>ヲ</sup>次<sup>ニ</sup>如<sup>シ</sup>中輩<sup>ノ</sup>者<sup>ニ</sup>也。

この三輩往生文では、『論註』善巧撰化において曇鸞が指摘するように淨土への願生に際して菩薩心を發することが三輩の各々に説かれている。さらに上輩においては、淨土への願生という点に関連して、今世における願見仏についても菩提心を發することが不可欠であるとされている。さらに『無量壽經』においてこの他に願生に関して菩提心を發することを説いているのは、第十九願の

設<sup>シ</sup>我<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>仏<sup>ヲ</sup>十方衆生發<sup>シ</sup>菩提心<sup>ヲ</sup>修<sup>シ</sup>諸功德<sup>ヲ</sup>至心發願<sup>シ</sup>欲<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>我國<sup>ニ</sup>臨<sup>シ</sup>壽終<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>假令<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>与<sup>ニ</sup>大衆<sup>ニ</sup>圍繞<sup>シ</sup>現<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>人<sup>ヲ</sup>前<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>取<sup>ニ</sup>正覺<sup>ヲ</sup>。

及び第三十五願の

設<sup>シ</sup>我<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>仏<sup>ヲ</sup>十方無量不可思議諸<sup>ノ</sup>仏世界<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>有<sup>ニ</sup>女人<sup>ニ</sup>聞<sup>テ</sup>我<sup>ノ</sup>名字<sup>ヲ</sup>歡喜信樂發<sup>シ</sup>菩提心<sup>ヲ</sup>厭<sup>シ</sup>惡<sup>ヲ</sup>女身<sup>ヲ</sup>壽終<sup>ノ</sup>之後復<sup>タ</sup>為<sup>ニ</sup>女像<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>取<sup>ニ</sup>覺<sup>ヲ</sup>。

とである。三輩往生文では發菩提心を説く直後の經文に「一向專念<sup>ニ</sup>無量壽<sup>ノ</sup>仏<sup>ヲ</sup>」(上・中輩)及び「一向專意<sup>ニ</sup>

乃至十念念無量寿仏<sup>ヲ</sup>（下輩）を伴っているが、この発菩提心と念無量寿仏との関係はいかなるものであるかはこの経文の上だけでは不明確であると云えよう。第十九願と第三十五願は浄土への願生に際して発菩提心を説くに止まり、念無量寿仏に関する記述は経文の上には見出せない。願生に際して念無量寿仏を記すと思われるものに第十八願の

設我得<sup>シ</sup>仏<sup>ニ</sup>、十方<sup>ノ</sup>衆生、至心<sup>ニ</sup>信樂<sup>シ</sup>、欲<sup>シ</sup>生<sup>セ</sup>我國<sup>ニ</sup>、乃至十念、若不<sup>レ</sup>生<sup>ハ</sup>者、不<sup>レ</sup>取<sup>ニ</sup>正覺<sup>ヲ</sup>。（下略<sup>⑤</sup>）  
及び下巻の三輩往生文直前に記されている

諸有衆生、聞<sup>キ</sup>其名号<sup>一</sup>、信心歡喜、乃至一念、至心<sup>ニ</sup>廻向<sup>シ</sup>、願<sup>ス</sup>生<sup>ハ</sup>彼國<sup>ニ</sup>、即得<sup>チ</sup>往生<sup>ヲ</sup>、住<sup>ス</sup>不退転<sup>ニ</sup>。（下略<sup>⑥</sup>）  
とがあるが、兩者共に発菩提心の記述はない。従って発菩提心と念無量寿仏の関係は、『無量寿経』の中では三輩往生文以外の箇所からは明確にすることは困難であると云わなければならない。そしてまた唯一兩者を併記する三輩往生文自体において兩者の関係が不明確なのであるから、『無量寿経』において兩者を明確な関係づけによって捕えることは不可能であると云わざるを得ない<sup>⑦</sup>。しかしあえて推測するならば、この三輩往生文では発菩提心が念無量寿仏をなして浄土に願生する者にとり、往生を達成する上で不可欠であると考えられているのではなからうか。即ち発菩提心に基づく念無量寿仏が往生の要因と考えられているのではなからうか。

一一

『論註』の善巧攝化には、右に検討したごとく念無量寿仏をなして浄土に願生する者にとり不可欠と推定される発菩提心を取り上げ、「願<sup>ス</sup>生<sup>ハ</sup>彼<sup>ニ</sup>、安樂浄土<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>、要<sup>ス</sup>発<sup>ス</sup>無上菩提<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>也。」と述べ、浄土への願生に際して発菩提心が不可欠であるかのごとく記している。しかしはたしてこの記述は率直にそう理解すべきであらうか。

まずこの記述がなされている善巧摂化とは、曇鸞自らが『論註』卷下の最初に世親の『往生論』（以下『論』と記す）の長行を十重に分け、

己下此は解義分。此分中、義有十重。一者願偈大意。二者起觀生信。三者觀行体相。四者淨入願心。五者善巧摂化。六者離菩提障。七者順菩提門。八者名義摂対。九者願事成就。十者利行満足。と述べる内の第五に当る。この善巧摂化に該当する『論』の文は以下のごとくである。

如<sup>レ</sup>是、菩薩奢摩他毗婆舍那、広略修行、成就<sup>ニ</sup>柔軟心<sup>一</sup>、如<sup>ニ</sup>実知<sup>ル</sup>広略諸法<sup>一</sup>。如<sup>レ</sup>是成<sup>ニ</sup>就<sup>ス</sup>巧方便廻向<sup>一</sup>。何<sup>レ</sup>者菩薩、巧方便廻向<sup>ナル</sup>。菩薩、巧方便廻向者、謂<sup>ク</sup>説<sup>ニ</sup>禮拜等<sup>一</sup>、五種修行<sup>ヲ以テ</sup>、所集一切功德善根、不<sup>レ</sup>求<sup>ニ</sup>自身住持<sup>一</sup>之樂、欲<sup>ス</sup>拔<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>一</sup>苦故、作<sup>下</sup>願<sup>ス</sup>摂<sup>ニ</sup>取<sup>一</sup>一切衆生、共<sup>ニ</sup>同<sup>一</sup>生<sup>中</sup>彼安樂仏國<sup>上</sup>。是名<sup>ニ</sup>菩薩巧方便廻向成就<sup>一</sup>。

ここに記される柔軟心の成就、及び菩薩の巧方便廻向を曇鸞がいかに理解したかを明らかにすることが、三輩往生文の發菩提心の依用の意図を探る上で重要であると思われる。即ち曇鸞はこれらを此彼二土のいづれにおいて捕えていたのであろうか。この問題は曇鸞が『論註』において願生者をいかなる者を中心として捕えていたかという点と深く係わってくると思われる。従つてまず曇鸞が『論註』を撰述した姿勢を考えることにより、願生者を具体的にはいかなる者を中心として捕えていたかを考えてみたい。

### 三

曇鸞は『論註』卷上の開卷初頭において龍樹の『十住毘婆沙論』易行品の趣意を

謹案<sup>チスルニ</sup>龍樹菩薩、十住毗婆沙云。菩薩求<sup>ニ</sup>阿毗跋致<sup>一</sup>、有<sup>ニ</sup>三二種<sup>一</sup>道。一者難行道。二者易行道。

と述べ、菩薩が阿毘跋致を求めるのに難行道と易行道の二種があることを明している。この難行道については、

難行道者、謂於五濁之世於無仏時、求阿毘跋致為難<sup>⑩</sup>。

と述べられている。曇鸞はまずここで現実の此土を五濁の世・無仏の時と捕えている。そしてこの現実の此土において阿毘跋致を求めることが難行道であるとしている。一方、易行道については、

易行道者、謂但以信仏、因縁願生淨土、乘二仏願力、便得往三生、彼清淨土。仏力住持、即入大乘正定之聚。正定、即是阿毘跋致<sup>⑪</sup>。

と述べられている。ここでは先の難行道において示された現実の此土を五濁の世・無仏の時とする考えに基づいて、信仏の因縁によつてこの此土を離れて有仏の清淨の土に往生し、そこにおいて仏力に住持されて正定聚となること、が易行道であるとしている。このように曇鸞はまず第一に、五濁の世・無仏の時における阿毘跋致の獲得を『論註』撰述の目的としている。そしてこの目的に対する具体的方法として、有仏の清淨の土である阿弥陀仏の淨土とそこへの往生を開顯している。

では曇鸞はいかなる者を中心において淨土への願生者を考えていたのであろうか。この点を考察する上で、曇鸞が『論註』巻上の最後に八番問答を設けていることが注目される。八番問答とは周知のごとく『無量寿經』第十八願の「唯除五逆、誹謗正法」と『観無量寿經』（以下『観經』と記す）下品下生の「作不善業、五逆十惡、具諸不善」<sup>⑫</sup>との関係を問題としている。いったい『論註』が『論』の注釈のみに始終するならば、ここに八番問答を設ける必要はあっただろうか。曇鸞は八番問答をあえて設けることにより、ここに『論』の注釈にのみ始終しては述べることができない自己の主張を述べているのではなからうか。この『無量寿經』第十八願の「五逆誹謗正法」の衆生と『観經』下品下生の「五逆十惡」の衆生に曇鸞が注目し、その両者の関係を問題としたのは、彼が

これらの衆生に対して深い関心を持つていたからに他ならない。そしてこれは恐らく曇鸞が現実の衆生をこれらの衆生の内に見出そうとしていたからであろう。即ち八番問答の第一問答において、

問曰。天親菩薩、回向章、中、言ニ普共諸衆生往生安樂國、此指レ共ニ何等、衆生ト耶。

と述べているが、これは浄土への願生者が具体的にいかなる衆生を中心とするかを問うものである。これに対し曇鸞は、

答曰。案ニ王舍城所説、無量寿經、(中略)諸有衆生、聞ニ其名号、信心歡喜、乃至一念、至心回向、願スレハ生ニ彼國、即得ニ往生、住ニ不退転、唯除ニ五逆、誹謗、正法、案レ此而言、一切外凡夫、人、皆得ニ往生、又如ニ觀無量寿經、有ニ九品、往生、(中略)以此經証、明知、下品凡夫、但令下不誹謗正法、信仏、因縁、皆得ニ往生。

と述べている。ここでは『無量寿經』巻下の初頭の經文によつて往生が認められる衆生の下限を一切外凡夫、即ち十信の位以下の者とし、続いて『觀經』下品下生の經文によつて下品下生の者の往生を認めている。そしてこの下品下生の「五逆十惡」と『無量寿經』の「五逆誹謗正法」が第二問答以下で問題とされ、「五逆十惡」の往生を認める一方で、「誹謗正法」の往生を否定している。従つて「五逆十惡」の下品下生は往生が許される最下限の者とされている。しかし下品下生の往生にこれほどまでに曇鸞がこだわる理由は、先述のごとく現実の衆生、即ち五濁の世・無仏の時の衆生をこの下品下生において捕えようとしていたからであると考えられる。従つて五濁の世・無仏の時と云う現実の衆生を救済するために開顯された浄土への願生という方法は、その具体的対象として下品下生の衆生を中心として曇鸞は考えようとする傾向があつたと云えよう。このような視點に曇鸞は立脚して、下品下生の衆生の往生について直接言及することのない『論』に対し、『論註』を撰述するにあたり、この點に言及しなけ

ればならない必要が生じたのであり、あえて八番問答を設けることによってこの点に言及したと云えよう。

このような曇鸞の視点は、往生に関する見解にも見出すことができる。曇鸞は『論註』巻下、観行体相において、国土莊嚴功德を述べた後に問答を設け、

問曰。上言<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>三<sup>ニ</sup>生<sup>ハ</sup>無<sup>ク</sup>生<sup>ス</sup>。当<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>品<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>者<sup>ヲ</sup>。若<sup>ク</sup>下<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>品<sup>ノ</sup>人<sup>ヲ</sup>。乘<sup>テ</sup>十<sup>ニ</sup>念<sup>ヲ</sup>往<sup>ス</sup>生<sup>ス</sup>。豈<sup>ニ</sup>非<sup>レ</sup>取<sup>リ</sup>二<sup>ニ</sup>実<sup>ヲ</sup>生<sup>ヲ</sup>耶。但<sup>テ</sup>取<sup>リ</sup>二<sup>ニ</sup>実<sup>ヲ</sup>生<sup>ヲ</sup>。即<sup>チ</sup>墮<sup>セン</sup>三<sup>ニ</sup>執<sup>ヲ</sup>。一<sup>ニ</sup>恐<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ズ</sup>往<sup>ス</sup>生<sup>ス</sup>。二<sup>ニ</sup>恐<sup>ハ</sup>更<sup>ニ</sup>生<sup>ス</sup>生<sup>ス</sup>レ惑<sup>ス</sup>。

と述べている。これは入第一義諦釈の中で「彼、淨土、是、阿弥陀如来、清淨本願無生之生」と述べた点について、この無生の生を知る者は上品生のものであるとしている。そして右の問いに答えて、

答。(中略)彼、下品、人、雖<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>リ</sup>法<sup>ニ</sup>性<sup>ヲ</sup>無<sup>ク</sup>生<sup>ス</sup>。但<sup>テ</sup>以下<sup>ニ</sup>稱<sup>スル</sup>二<sup>ニ</sup>仏<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>力<sup>ヲ</sup>。作<sup>チ</sup>二<sup>ニ</sup>往<sup>ス</sup>生<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>。願<sup>ス</sup>レ生<sup>ス</sup>二<sup>ニ</sup>彼<sup>ノ</sup>土<sup>ヲ</sup>。彼<sup>ノ</sup>土<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>無<sup>ク</sup>生<sup>ス</sup>界<sup>ヲ</sup>。見<sup>ス</sup>生<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>火<sup>ヲ</sup>。自然<sup>ニ</sup>而<sup>テ</sup>滅<sup>ス</sup>。

と述べている。ここでは下品下生の者が称名によって願生するならば、たとえ淨土が無生の生であることを知らなくとも、往生ができるとしている。これは入第一義諦釈に「体ニ夫、生理ニ、謂ニ之、淨土。」と述べている点と深い関係がある。即ち淨土は無生界であるから、たとえ下品下生の者が無生の理を知らずに見生によって願生しても、この者は淨土に往生すれば結果的には無生の理を知るとしている。このように、曇鸞は往生に関する理解においても、無生の理を知らない下品下生の者に注目し、この下品下生の者の往生が許されることを強調している。

以上のように、曇鸞は『論註』において『觀經』の下品下生に非常な関心を払っている。これは彼が下品下生に現実の五濁の世・無仏の時の衆生を見出すことにより、淨土への願生をなす衆生の具体的相を下品下生を中心に捕えようとする傾向があつたためであると考えられる。

四

次に『論註』の善巧攝化を中心とする曇鸞の記述を通じて、先述の柔軟心成就の菩薩がいかなる者であるかを考察してみよう。『論註』巻下、淨入願心には、

上、国土、莊嚴十七句、如來、莊嚴八句、菩薩、莊嚴四句、爲廣。入一法句、爲略。何故示現廣略相入。諸仏菩薩有三種法身。一者法性法身。二者方便法身。由法性法身生方便法身。由方便法身出法性法身。此一法身、異而不可分。一而不可同。是故廣略相入、統一法、名一菩薩、若不不知廣略相入、則不能自利利他。<sup>⑤</sup>

と述べられている。ここでは三種二十九句の莊嚴が廣とされ、入一法句が略とされ、両者が相入するとされている。そしてさらに前者を方便法身、後者を法性法身とし、両者の由生・由出の關係において相入を示し、両者が不可分・不可同なることを明かしている。その後、菩薩が自利利他を行なう上で、かかる廣略相入を知ることが不可欠であると述べ、菩薩も阿弥陀仏と同様に法性法身・方便法身の廣略相入によって自利利他を展開することを予想しているようである。この廣略相入を知る菩薩とは、得往生者、願生者のいずれであると曇鸞は考えていたのであるか。この淨入願心の主張に基づき、曇鸞は善巧攝化に柔軟心者、謂、廣略止觀相順、修行成不二心也。<sup>⑥</sup>

と述べ、廣略相入を知ることによって初めて菩薩は不二心、即ち柔軟心を成就するとしている。そしてこれに続いて、『論』の「如実知三廣略諸法」の文に注釈して、

如実知者、如実相而知也。廣中二十九句、略中一句、莫非実相也。<sup>⑦</sup>



と述べている。ここでは広・略とは実相そのものであるとしている。従って、菩薩が柔軟心を成就すると云うことは、菩薩が実相そのものを知ることには他ならないと云えよう。そして菩薩が自利利他を行なうためには、菩薩自身が広略相入、即ち実相を知ることが不可欠であると考えていたようである。

さらに起観生信の廻向門釈の還相廻向においては、

還相者、生<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>土<sup>ニ</sup>已<sup>テ</sup>、得<sup>テ</sup>奢摩他毗婆舍那<sup>ヲ</sup>、方便力成就<sup>シスレハ</sup>、廻<sup>シ</sup>入<sup>ル</sup>生死<sup>ノ</sup>稠林<sup>ニ</sup>、教<sup>ニ</sup>化<sup>ス</sup>一切<sup>ノ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>、共<sup>ニ</sup>向<sup>フ</sup>道<sup>ニ</sup>。<sup>⑩</sup>

と述べているが、この内で「生<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>土<sup>ニ</sup>已<sup>テ</sup>、得<sup>テ</sup>奢摩他毗婆舍那<sup>ヲ</sup>、方便力成就<sup>シスレハ</sup>」と記されている点が注目される。この還相廻向の記述では明確に「生<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>土<sup>ニ</sup>已<sup>テ</sup>」とあり、浄土に往生した後のこととして述べられる「得<sup>テ</sup>奢摩他毗婆舍那<sup>ヲ</sup>、方便力成就<sup>シスレハ</sup>」とは、善巧摂化における『論』の

菩薩奢摩他毗婆舍那<sup>ヲ</sup>、広略修行<sup>ヲ</sup>、成就<sup>スレハ</sup>柔軟心<sup>ヲ</sup>、如<sup>ニ</sup>実<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>広略<sup>ノ</sup>諸法<sup>ヲ</sup>、如<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>成就<sup>ス</sup>巧方便廻向<sup>ヲ</sup>。<sup>⑪</sup>

の記述と相似するものであると云えよう。即ち起観生信の還相廻向の記述は、『論』の上記の文に基づいたものであると考えられる。従ってこの起観生信の「方便力成就<sup>シスレハ</sup>」とは、『論』の「巧方便廻向」として展開されるものであると考えられる。また前述のごとく曇鸞は善巧摂化において「如<sup>ニ</sup>実<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>広略<sup>ノ</sup>諸法<sup>ヲ</sup>」とは実相を知ることであるとしているのだから、起観生信の「得<sup>テ</sup>奢摩他毗婆舍那<sup>ヲ</sup>、方便力成就<sup>シスレハ</sup>」とは実相を知ることであると考えていたと云えよう。

以上のごとく起観生信の還相廻向の記述と善巧摂化における『論』の記述の相似から考えるならば、曇鸞は起観生信に「生<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>土<sup>ニ</sup>已<sup>テ</sup>」と明記し、浄土に往生した後において「得<sup>テ</sup>奢摩他毗婆舍那<sup>ヲ</sup>、方便力成就<sup>シスレハ</sup>」を考えていたのであるから、前掲の『論』の善巧摂化の文を、浄土において菩薩が奢摩他毗婆舍那を修することによって広略相

入、即ち実相を知り、柔軟心を成就して巧方便廻向を成就すると考えていたと云えよう。即ち曇鸞は『論』の「菩薩」について、これを善巧摂化で浄土の菩薩として捕え、また「巧方便廻向」を主に還相廻向として位置づけていると考えられる。

## 五

このように曇鸞は、善巧摂化における『論』の巧方便廻向をなす菩薩を、浄土の菩薩と考えていたと云えるのであるが、前に検討した曇鸞の『論註』撰述の姿勢とこの巧方便廻向をなす菩薩を浄土の菩薩とする見解は矛盾するか否かを考えてみよう。

もし仮にこの善巧摂化の柔軟心成就の巧方便廻向をなす菩薩が此土の菩薩であり、巧方便廻向を往相廻向が中心であるとすれば、この菩薩は実相を知ると云う点において上品生の者のみが該当し得るのみであり、下品下生の者はたして該当するであらうか。臨終における切迫した時において、善知識の方便安慰により阿弥陀仏を念・称する下品下生の者が、はたして『論』に「如<sub>レ</sub>是、菩薩奢摩他、毗婆舍那、広略、修行、成<sub>ニ</sub>就、柔軟心、一<sub>ニ</sub>如実、知<sub>ニ</sub>広略、諸法、如<sub>レ</sub>是、成<sub>ニ</sub>就、巧方便廻向、何<sub>レ</sub>者菩薩、巧方便廻向、(中略)不<sub>レ</sub>求<sub>ニ</sub>自身住持、之<sub>レ</sub>樂、欲<sub>レ</sub>拔<sub>ニ</sub>一切衆生、苦<sub>ニ</sub>故、作<sub>ニ</sub>願、撰<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>一切衆生、共<sub>ニ</sub>同<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>彼<sub>ニ</sub>安樂仏國<sub>ニ</sub>」と述べられるごとき巧方便廻向をなすことが可能であろうか。

また仮にこの巧方便廻向が此土において下品下生の者が自己の力ではなく「阿弥陀如来、至極無生、宝珠」の名号の働き、即ち仏力によって行なわれるとして、下品下生の者の此土での巧方便廻向が可能であることにより、下品下生を願生者の中の特種なものとして位置づけるとしても、この善巧摂化の曇鸞の注釈は何ら下品下生に関して特

筆してはいない。即ち柔軟心成就の菩薩を此土の菩薩と考えるならば、善巧摂化の注釈はただ上品生の者を中心とする記述に始終していると云わざるをえない。前述のごとく曇鸞は下品下生の者に対して深い関心を示しているのであるから、もし仮に曇鸞がこの善巧摂化を往相廻向を主としたものと考え、巧方便廻向をなす柔軟心成就の菩薩を此土の菩薩と考えていたのならば、当然この善巧摂化において下品下生の者に対する何らかの注釈が加えられていなければならないのではなからうか。

このように曇鸞の『論註』における願生者の理解を通じて、この善巧摂化は浄土の菩薩に関するものであり、巧方便廻向は還相廻向を主にすると考えるべきものではなからうか。

## 六

さて、善巧摂化においては前述の浄入願心における「菩薩、若不<sup>レ</sup>知<sup>ハ</sup>広略相入<sup>ハ</sup>、則<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ニ</sup>自利利他<sup>ス</sup>」の文に基づき、実相を知り得た柔軟心成就の浄土の菩薩が自利利他することを、具体的にその利他面を中心に菩薩の巧方便廻向として述べられている。菩薩が巧方便廻向を展開する過程を、曇鸞は以下のごとく述べている。

以<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>実相<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>、則<sup>チ</sup>知<sup>ル</sup>三界<sup>ノ</sup>衆生<sup>ノ</sup>虚妄<sup>ノ</sup>相<sup>ニ</sup>也<sup>⑤</sup>。知<sup>レ</sup>衆生<sup>ノ</sup>虚妄<sup>ノ</sup>、則<sup>チ</sup>生<sup>ス</sup>眞実<sup>ノ</sup>慈悲<sup>ヲ</sup>也<sup>⑥</sup>。知<sup>レ</sup>眞実<sup>ノ</sup>法身<sup>ハ</sup>、則<sup>チ</sup>起<sup>ス</sup>眞実<sup>ノ</sup>帰依<sup>ヲ</sup>也<sup>⑦</sup>。慈悲<sup>ト</sup>之<sup>ヲ</sup>与<sup>フ</sup>帰依<sup>ニ</sup>巧方便<sup>ト</sup>在<sup>レ</sup>下<sup>⑧</sup>。

ここでは柔軟心成就の菩薩は実相を知るが故に、この実相の智慧に基づいて三界の衆生の虚妄の相を知ることができると述べられている。曇鸞は三界の衆生の虚妄の相を具体的には虚偽相・輪転相・無窮相の三相によって捕え、それをすべて有漏であり、法性に順ぜず、二諦に順じない者の相としている。⑤。そしてかかる三界の衆生の虚妄の相を虚妄なるものとして知り得るのは、先の善巧摂化の文では「以<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>実相<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>、則<sup>チ</sup>知<sup>ル</sup>三界<sup>ノ</sup>衆生<sup>ノ</sup>虚妄<sup>ノ</sup>相<sup>ニ</sup>也<sup>⑥</sup>。」と

して、実相を知ることによって可能であると述べている。この実相を知ると云うことは、具体的には淨入願心において眞実智慧と記されている実相の智慧を指すと云えよう。即ち淨入願心には、

眞実智慧者、実相智慧也。実相無相故、眞智無知也。(中略)無知故、能無不<sub>レ</sub>知。是故一切種智即眞実智慧也。以<sub>二</sub>眞実<sub>一</sub>而目<sub>二</sub>智慧<sub>一</sub>、明<sub>二</sub>智慧<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>非<sub>レ</sub>作<sub>一</sub>也。

と述べられている。ここでは実相の智慧が眞実智慧とされ、さらに一切種智ともされている。かかる一切種智はまた觀行体相において、

問曰。心入<sub>二</sub>実相<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>無知<sub>一</sub>、云何得<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>一切種智<sub>一</sub>耶。

答曰。凡心有知、則有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知。聖心無知故、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知。無知而知、知即無知也。

とも述べられている。これに基づくならば、実相を知る一切種智とは、「無知而知、知即無知也。」として説明される戲論を超え、さらにその無分別・無戲論にも止住することなく「聖心無知故、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知。」として積極的なものごとを知りきわめる智として展開されるものである。かかる一切種智を得た柔軟心成就の菩薩こそが、初めて三界の衆生の虚妄の相を知ることが可能であるとされている。そしてこの虚妄の相を知るならば、そこに眞実の慈悲が生じると前述の善巧摂化の文は述べている。この柔軟心成就の菩薩の慈悲に関して、曇鸞は障菩提門において、

拔<sub>レ</sub>苦<sub>二</sub>曰<sub>レ</sub>慈、与<sub>レ</sub>樂<sub>二</sub>曰<sub>レ</sub>悲、依<sub>レ</sub>慈故拔<sub>二</sub>一切衆生<sub>一</sub>苦、依<sub>レ</sub>悲故遠<sub>下</sub>離<sub>上</sub>無<sub>レ</sub>安<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub>心<sub>上</sub>。

と述べている。即ち一切衆生の苦を抜き、衆生を安んずる心が慈悲であるとしている。

この慈悲の展開は具体的には廻向と密接な關係を有している。『論註』卷下、起觀生信の廻向門釈においては、  
 廻向有三種、相。一者往相。二者還相。往相者、以三已功德、廻施一切衆生、作三願、共往三生、彼  
 阿彌陀如来、安樂淨土。還相者、生三彼土已、得三奢摩他毗婆舍那、方便力成就、廻入生死、稠林一教化、  
 一切衆生、共向三仏道。若往、若還、皆為下拔三衆生、渡中生死海。

と述べられている。即ちここでは往相廻向・還相廻向の二者によって廻向が説明されている。往相廻向とは願生者  
 自身が自己の功德を一切衆生に廻施して一切衆生と共に往生することを願うものであるとされ、還相廻向とは先に  
 も触れたように願生者が淨土に往生した後、奢摩他・毗婆舍那を得て方便力を成就し、再び淨土から生死界に赴い  
 て一切衆生を教化することであるとされている。さらに『論註』卷上においても

廻向者、回三已功德、普施三衆生、共見三阿彌陀如来、生三安樂國。

と述べられている。これは『論』の「我作論說、偈、願見彌陀仏、普共三諸衆生、往生三安樂國」に付され  
 た注釈であるから、往相廻向に該当すると云えよう。

この両者の廻向の説明において、往還二廻向と云う視点より、その目的と方法を考えてみよう。まず往相廻向に  
 ついては、その目的が起觀生信では「共往生、彼阿彌陀如来、安樂淨土」と記され、卷上では「共見三阿彌陀  
 如来、生三安樂國」と記され、後者には見仏を含むものの両者は共に往生を志向している。そしてその方法は、  
 起觀生信では「以三已功德、廻施一切衆生」と記し、卷上では「回三已功德、普施三衆生」として両者共に自  
 己の功德を衆生に施すとしている。次に還相廻向については、起觀生信ではその目的を「共向三仏道」と記して

成仏そのものを志向していると考えられ、その方法は「廻入<sup>ニ</sup>生死<sup>ノ</sup>稠林<sup>ニ</sup>教化<sup>シ</sup>一切衆生<sup>ニ</sup>」と記して往相廻向の方法に比して、より積極的なものとなっている。以上よりして、往相廻向は自己の功德を衆生に施すと云う方法により往生を目的とするものであり、還相廻向は生死界に再び還つて衆生を教化すると云う方法により成仏を目的とするものであると云えよう。

このような視点に立つて善巧摂化に記された廻向の説明を考えてみよう。善巧摂化の廻向の説明とは以下のごとくである。

凡釈<sup>ニ</sup>廻向<sup>ノ</sup>名義<sup>ヲ</sup>、謂<sup>フ</sup>以<sup>テ</sup>己<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>集<sup>メ</sup>一切<sup>ノ</sup>功德<sup>ヲ</sup>、施<sup>ス</sup>与<sup>テ</sup>一切衆生<sup>ニ</sup>、共<sup>ニ</sup>向<sup>テ</sup>仏道<sup>ニ</sup>。<sup>⑧</sup>

ここでは廻向の目的は右の考察からして成仏を志向する点において還相廻向と云えるが、方法そのものは往相廻向であり、往還二廻向に分類されるべきものと云うよりは、廻向そのものの一般概念が述べられているようである。<sup>⑨</sup>

廻向の一般概念が右の善巧摂化のごとくであるとするならば、先の往相廻向と還相廻向の目的の相違はいかに考えられるべきであろうか。これは往相廻向が志求する浄土の性格において説明される。即ち善巧摂化に「彼<sup>ノ</sup>仏国<sup>ニ</sup>、即是<sup>ニ</sup>畢竟成仏<sup>ノ</sup>道路<sup>ニ</sup>、無上<sup>ノ</sup>方便也<sup>⑩</sup>。」と述べられるごとく、衆生が浄土に往生すれば成仏が約束されるからである。従つて衆生にとっては浄土に往生できるか否かが、成仏の可否をも決定することになる。このような立場においては成仏の可否よりも往生の得不得に関心が移行することになる。即ち往相廻向においては、たとへ廻向の一般概念が前述の善巧摂化のように成仏を目的とするものであつても、浄土では成仏が約束されるのであるから、眼前に直接目的として表面化するものは成仏が約束されるか否か、即ち往生の得不得の問題となる。そしてかかる立場においては成仏の問題が往生の問題の背後になると云えよう。このように往相廻向では浄土と云う成仏が約束された場を設定することにより、成仏と云う廻向本来の目的は往生と云う眼前の目的の背後となる。そして往生を得た時

において初めて成仏と云う廻向本来の目的が表面化すると云えよう。<sup>④</sup>

## 八

善巧摂化には先述の廻向の一般概念が記された後に、巧方便廻向の説明が行なわれている。

巧方便者、謂菩薩願、以己智慧、火、燒一切衆生煩惱、艸木、若有衆生不<sub>ニ</sub>成仏、我<sub>レ</sub>不<sub>ニ</sub>作仏。而衆生未<sub>ニ</sub>尽、成仏、菩薩已<sub>ニ</sub>自成仏。譬<sub>レ</sub>如火、燒一切、艸木、燒令<sub>中</sub>使<sub>上</sub>尽。艸木未<sub>レ</sub>尽、火、燒已<sub>ニ</sub>尽。以下<sub>ニ</sub>後<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>身<sub>ニ</sub>而身先<sub>上</sub>故、名<sub>ニ</sub>巧方便。此中、言<sub>ニ</sub>方便者、謂<sub>レ</sub>作願、攝取一切衆生、共<sub>ニ</sub>同生<sub>中</sub>彼、安樂仏國<sub>上</sub>。彼、仏國、即是、畢竟成仏、道路、無上、方便也。<sup>⑤</sup>

先述の考察で明らかとなったように、巧方便廻向とは還相廻向として位置づけられるから、ここでも成仏が志向されていると云う点において、右の考察の結果と軌を一にするものである。そして「智慧、火」とは先の考察よりして、実相を知る一切種智であると云えよう。また「作願、攝取一切衆生、共<sub>ニ</sub>同生<sub>中</sub>彼、安樂仏國<sub>上</sub>。」とは、起觀生信の還相廻向に記される「廻入、生死、稠林、教化、一切衆生」と云う方法によって展開されるものであり、『論』が「出、第五門」として記すものである。ここにおいて衆生を攝取して共に同じく安樂國に生ぜんと云われるのは、還相廻向をなす菩薩、即ち柔軟心成就の淨土の菩薩が自己と同様に衆生を淨土に願生させることであるから、菩薩の還相廻向は被廻向者をして往相廻向させることであると云える。即ち還相廻向の具体的方法である「教化、一切衆生」とは衆生を往相廻向させると云うことによって内容づけられるものであると云えよう。この点に關しては後に再び触れるであらう。

九

右の善巧摂化に巧方便の「巧」の字を説明して、菩薩が一切衆生を成仏させるまでは成仏しないと願いつつも自身が一切衆生に先立って成仏する意であるとしているが、この点は利行満足の曇鸞の自利利他の理解と深い係りがある。利行満足には、

応<sup>ト</sup>知<sup>レ</sup>下<sup>カ</sup>由<sup>ニ</sup>自利<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>、則<sup>チ</sup>能<sup>ス</sup>利<sup>ス</sup>他<sup>ニ</sup>。非<sup>ト</sup>中<sup>一</sup>是<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ス</sup>自利<sup>ニ</sup>、而<sup>ス</sup>能<sup>ス</sup>利<sup>ス</sup>他<sup>ニ</sup>也<sup>④</sup>。  
 応<sup>シ</sup>知<sup>ト</sup>下<sup>カ</sup>由<sup>ニ</sup>利他<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>、則<sup>チ</sup>能<sup>ス</sup>自利<sup>ス</sup>。非<sup>ト</sup>中<sup>一</sup>是<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ス</sup>利<sup>ス</sup>他<sup>ニ</sup>、而<sup>ス</sup>能<sup>ス</sup>自利<sup>ス</sup>也<sup>⑤</sup>。

と述べ、自利利他が即一的双運関係にあることを明かしている。従って浄土の柔軟心成就の菩薩の巧方便廻向は菩薩の利他行であると共に、自利行であると云えよう。さらに曇鸞は願事成就において『論』の菩薩、如<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>修<sup>フ</sup>五念門<sup>ノ</sup>行<sup>ヲ</sup>、自利利他<sup>ヲ</sup>、速<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup>成<sup>ニ</sup>就<sup>スルヲ</sup>。阿耨多羅三藐三菩提<sup>ニ</sup>故<sup>⑥</sup>。

に対して問答を設け、

問曰。有<sup>ニ</sup>何<sup>ノ</sup>因縁<sup>ヲ</sup>、言<sup>フ</sup>速<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup>成就<sup>スルヲ</sup>阿耨多羅三藐三菩提<sup>ニ</sup>。

答曰。論<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>。修<sup>フ</sup>五門<sup>ノ</sup>行<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>自利利他成就<sup>スルヲ</sup>故<sup>⑦</sup>。然<sup>ル</sup>覈<sup>ス</sup>求<sup>ム</sup>其<sup>ノ</sup>本<sup>ヲ</sup>、阿<sup>ノ</sup>弥<sup>ノ</sup>陀<sup>ノ</sup>如<sup>ノ</sup>来<sup>ノ</sup>、為<sup>ス</sup>増上縁<sup>ト</sup>。他<sup>ノ</sup>利<sup>ト</sup>之<sup>ヲ</sup>与<sup>フ</sup>自利他<sup>ニ</sup>談<sup>ス</sup>、有<sup>ニ</sup>左右<sup>ノ</sup>。若<sup>シ</sup>自<sup>レ</sup>仏<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>言<sup>フ</sup>、宜<sup>ク</sup>言<sup>フ</sup>利他<sup>ト</sup>、自<sup>ニ</sup>衆生<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>言<sup>フ</sup>、宜<sup>ク</sup>言<sup>フ</sup>他利<sup>ト</sup>。今<sup>ニ</sup>將<sup>ニ</sup>レ談<sup>ニ</sup>仏力<sup>ヲ</sup>、是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>利他<sup>ヲ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>。当<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>此<sup>ノ</sup>意<sup>也</sup>。凡<sup>ソ</sup>是<sup>レ</sup>生<sup>スル</sup>彼<sup>ノ</sup>浄土<sup>ニ</sup>及<sup>ビ</sup>彼<sup>ノ</sup>菩薩人天<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>起<sup>ス</sup>諸<sup>ノ</sup>行<sup>ヲ</sup>、皆<sup>ニ</sup>縁<sup>ル</sup>阿<sup>ノ</sup>弥<sup>ノ</sup>陀<sup>ノ</sup>如<sup>ノ</sup>来<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>願<sup>ニ</sup>力<sup>ニ</sup>故<sup>⑧</sup>。何<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>。若<sup>シ</sup>非<sup>ハ</sup>仏力<sup>ニ</sup>、四十八願<sup>ニ</sup>便<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>徒<sup>ニ</sup>設<sup>ナラン</sup>故<sup>⑨</sup>。

と述べ、この後に『無量寿経』の第十八願、第十一願、第二十二願を引いてこれを証している。ここではまず、願生者が浄土に往生すること及び浄土で正定聚に住して必ず滅度に至って諸の廻伏の難がなく、常倫諸地の行を超出



して現前に普賢の徳を修習すること、即ち願生者が浄土往生を通じて浄土の衆生となり、自己の自利他行を完成して行く過程が一貫して阿弥陀仏の増上縁に基づいていることを明かしている。そしてこの阿弥陀仏の増上縁とは「凡<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>彼<sup>レ</sup>淨土<sup>ニ</sup>及<sup>レ</sup>彼<sup>レ</sup>菩薩<sup>ノ</sup>人天<sup>ノ</sup>所起<sup>ノ</sup>諸行<sup>ハ</sup>、皆縁<sup>ル</sup>阿弥陀<sup>ノ</sup>如來<sup>ノ</sup>本願力<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>。何以<sup>カ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>。若非<sup>シ</sup>仏力<sup>ニ</sup>、四十八願便是<sup>レ</sup>徒設<sup>ニ</sup>。」と述べられるごとく、阿弥陀仏因位の四十八願に基づくものであるとしている。

そして、この点をもとにして自利他の内、特に利他を問題とし、浄土の衆生が行なう利他行は阿弥陀仏が増上縁として浄土の衆生に働きかけるのであるから、阿弥陀仏の立場からは「利他」であるが、浄土の衆生の立場からは阿弥陀仏の増上縁を予想し得てこれが可能であるために「他利」とされている。即ち浄土の衆生が行なう利他行に関し、曇鸞はその主体を問題とし、阿弥陀仏の増上縁が存在する事実によって、ここに浄土の衆生と云う主体と阿弥陀仏と云う主体の両者を見出し、かかる両者によってこれが構成されることを明かしている。従って浄土の衆生の利他行は彼達自身の利他行（「他利」）であると共に、阿弥陀仏の利他行（「利他」）でもあると云う主体の二重的即一性が存在すると考えられよう。このように考えるならば、浄土の柔軟心成就の菩薩の巧方便廻向は阿弥陀仏の増上縁に基づくものであり、それは浄土の菩薩が表にあり阿弥陀仏が裏にある主体の二重的即一性と、浄土の菩薩の自利他即一の双運行であると云えよう。さらにこのことは、一方において菩薩として一切衆生が成仏するまでは自身も成仏しないと誓いながら既に成仏した阿弥陀仏が、他方においては浄土の菩薩を通じて自己の利他行を行なっているとも云えよう。即ち浄土の菩薩が三種二十九句莊嚴功德において、そのひとつとして位置づけられる時、その菩薩そのものも阿弥陀仏の利他としての働きを担うこととなるとも云えよう。<sup>⑤</sup> 以上のような理解に基づいて曇鸞は菩薩の巧方便廻向を捕えていると云える。

十

以上の考察で明らかになったごとく、曇鸞は善巧摂化において浄土の柔軟心成就の菩薩が還相廻向である巧方便廻向を行なうことを述べているのであるが、この善巧摂化に「案ニ王舎城所説無量寿經一、三輩生、中雖三行有ニ優劣一、莫レ不ニ皆発ニ無上菩提之心」と述べ、『無量寿經』三輩往生文の發菩提心を取り上げている。曇鸞はこれに続いて菩提心を説明して、

此無上菩提心即是願作仏心。

願作仏心即是度衆生心。

度衆生心即摂ニ取、衆生ニ生ニ有仏、国土ニ心。

と述べ、菩提心を願作仏心及び度衆生心のシノニムとしている。これは一般に菩提心が自利利他の両面を有する心とされる点に基づき、願作仏心によって自利面を、度衆生心によって利他面を示していると云えよう。この箇所の記事は前述のごとく浄入願心において「菩薩、若不レ知ニ広略相入一、則不レ能ニ自利利他」と述べられ、広略（即ち実相）を知れば菩薩は自利利他を行なうことが可能であるとされる点に基づいたものである。即ち今この菩提心を述べる善巧摂化が広略相入を知り得た柔軟心成就の菩薩に関するものであり、この柔軟心成就の菩薩が行なう巧方便廻向を述べる箇所であるから、右の浄入願心の記述を受けてここに浄入願心で示した自利利他を願作仏心・度衆生心として具体的に開示していると云えよう。そしてかかる自利利他が即一的双運の關係にある点は、前述のごとく利行満足において述べられている。

この度衆生心を曇鸞はさらに「摂ニ取、衆生ニ生ニ有仏、国土ニ心」と述べている。ここでは所化の対象である「衆

生」が有仏の国土に存在せず、無仏の国土に存在していること、即ち所化の対象が無仏の国土の「衆生」であることを予想していると考えられる。従つてこの文が浄土の柔軟心成就の菩薩が行なう還相廻向に関するものであることは先の考察を通じて明白であるから、かかる浄土の菩薩の還相廻向が主に無仏の国土の衆生を対象として行なわれるべきことを予想していると考えられる。この点は『論註』巻上、開卷初頭の前述の文において、『論註』撰述の根本課題を無仏の時における阿毘跋致の獲得と宣揚した点と密接な関係があると云えるが、かかる問題は本稿では立ち入らずにおくこととする。この「撰<sup>ニ</sup>取<sup>ヲ</sup>衆生<sup>ヲ</sup>生<sup>ニ</sup>有仏国土<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>」の文に続いて、これを具体的に前述のごとく「巧方便者（中略）以下<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>其身<sup>ヲ</sup>而身先<sup>ヲ</sup>上<sup>ニ</sup>故、名<sup>ヲ</sup>巧方便<sup>ト</sup>。此中、言<sup>ハ</sup>方便<sup>ト</sup>者、謂<sup>フ</sup>作<sup>ラ</sup>願<sup>ス</sup>撰<sup>ニ</sup>取<sup>ヲ</sup>一切衆生<sup>ヲ</sup>、共同<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>彼<sup>ヲ</sup>安樂仏国<sup>ニ</sup>」と述べ、衆生に往相廻向せしめることが巧方便廻向であるとしている。このように還相廻向も往相廻向と同様、阿弥陀仏の浄土とそこへの往生と云う具体的方法、即ち衆生を往相廻向せしめると云う方法が選取されていると云うことは、前述のごとく利行満足において「凡<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>生<sup>ニ</sup>彼<sup>ヲ</sup>浄土<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>彼<sup>ヲ</sup>菩薩人天<sup>ヲ</sup>所起<sup>ヲ</sup>諸行<sup>ヲ</sup>、皆緣<sup>ル</sup>阿弥陀如来<sup>ヲ</sup>本願力<sup>ニ</sup>故<sup>ト</sup>。」と述べられ、三願的証がなされるごとく、かかる選取そのものが根元的にはすべて阿弥陀仏の本願力、即ち阿弥陀仏の選取にかかるものであるからと云う点によつて説明される。この点において前述のごとく還相廻向の主体が浄土の菩薩と阿弥陀仏との両者であること云う、主体の二重的即一性が指摘される。

## 十一

右の善巧撰化の菩提心の説明に続いて曇鸞は菩提心を発すべきことを、

願<sup>ス</sup>生<sup>ニ</sup>彼<sup>ヲ</sup>安樂浄土<sup>ニ</sup>者、要<sup>ハ</sup>発<sup>ス</sup>無上菩提<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>也。若人<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>発<sup>ス</sup>無上菩提<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>、但<sup>レ</sup>聞<sup>ク</sup>彼<sup>ヲ</sup>国土<sup>ヲ</sup>受樂無間<sup>ニ</sup>、為<sup>ス</sup>樂<sup>ニ</sup>故<sup>ト</sup>願<sup>ス</sup>生<sup>ニ</sup>、亦<sup>ハ</sup>当<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ス</sup>往生<sup>ニ</sup>也<sup>ト</sup>。

『往生論註』の菩提心について

と述べている。ここでは文相の上からは一見、浄土の願生に際して發菩提心が要求されているようであるが、今までの考察において明らかなごとく、善巧摂化が浄土の菩薩の還相廻向を述べる箇所である点において、かかる場所に至って初めて願生に際して發菩提心を要求する記述がなされたと云うことに不自然さを感じる。

先の考察のごとく、菩提心は願作仏心・度衆生心と云う自利・利他により構成されるものである。先に考察した往還二廻向をこの自利・利他と云う視点において考えるならば、往相廻向では自己の願生と云う目的が自利面に、自己の功德を衆生に施すと云う方法が利他面に相当し、還相廻向では成仏を志向すると云う目的が自利面に、一切衆生を教化して願生させると云う方法が利他面に相当すると云えよう。しかし先述のごとく往相廻向では往生と云う眼前の目的が強調されるために、成仏と云う究極の目的がその背後になってしまった。従って曇鸞が菩提心の自利面に關して、それを願作仏心と云う成仏を志向するものとして捕える時、この菩提心は成仏を志向すると云う点において還相廻向と直接係わってくるものであると云えよう。また往相廻向では、その利他面は先述のごとく自己の功德を衆生に施すとのみ記して消極的なものであるのに対し、還相廻向はこれを一切衆生を教化して願生させると云う積極的な展開において示している。従って菩提心の利他面である度衆生心が積極的に展開するのは還相廻向であり、菩提心が積極的に展開されると云う点において還相廻向と直接係わってくるものであると云えよう。このように自利・利他両面において菩提心と直接係わるのは還相廻向であると云えよう。また願生者を下品下生のごとき低い機根によって捕えようとする傾向のある曇鸞において、菩提心の積極的展開を往相廻向に求めているとすることはできないと思われる。以上よりして菩提心が直接問題とされるのは還相廻向においてであると云えよう。従って曇鸞は還相廻向を述べる善巧摂化において初めて菩提心を問題として取り上げることにより、發菩提心の實質的な要求を往生後の浄土において還相廻向が行なわれる前、即ち方便力の成就において捕えていたと云えよう。そ

して往相廻向においては發菩提心を直接要求せず、單に願生及び自己の功德を衆生に施すとのみ消極的に記すに止めたと考えられる。

なぜならば、往相廻向において發菩提心が直接要求されなくとも、衆生が往生したならば菩提心が仏力によって生じさせられると曇鸞は考えていたからである。即ち『論註』卷下、触功德には淨土の宝性功德草について、

此増道事、同愛作<sup>一</sup>（中略）有菩薩字、愛作<sup>一</sup>形容端正、生三人、染著一經言。染之者、或生天上<sup>一</sup>、或發菩提心<sup>一</sup>。

と述べ、この草に触れると菩提心を發すとしている。また聲聞に關して『論註』卷上、大義門功德に、

聲聞、以實際<sup>一</sup>為証。計不<sup>レ</sup>應<sup>二</sup>更<sup>一</sup>能生<sup>三</sup>仏道<sup>一</sup>、根芽<sup>一</sup>、而<sup>レ</sup>仏以<sup>二</sup>本願<sup>一</sup>不可思議、神力<sup>一</sup>、攝<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>生<sup>二</sup>彼<sup>一</sup>、必當<sup>下</sup>復以<sup>二</sup>神力<sup>一</sup>、生<sup>二</sup>其<sup>一</sup>無上道心<sup>上</sup>。（中略）仏能使<sup>三</sup>聲聞<sup>一</sup>、復生<sup>二</sup>無上道心<sup>一</sup>。

と述べられ、無上道心、即ち菩提心なき聲聞が淨土で仏力によって菩提心を生じるとしている。また觀行体相では

菩薩、於<sup>二</sup>七地<sup>一</sup>中、得<sup>二</sup>大寂滅<sup>一</sup>、上<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>諸仏<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>求<sup>下</sup>、下<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>衆生<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>度<sup>下</sup>、欲<sup>下</sup>捨<sup>二</sup>仏道<sup>一</sup>、証<sup>中</sup>於<sup>上</sup>實際<sup>上</sup>。

爾時、若<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>十方諸仏<sup>一</sup>、神力<sup>一</sup>、加勸<sup>下</sup>、即便<sup>レ</sup>滅度<sup>下</sup>、与<sup>二</sup>三乘<sup>一</sup>無<sup>レ</sup>異<sup>一</sup>。菩薩、若<sup>レ</sup>往<sup>二</sup>生安樂<sup>一</sup>、見<sup>二</sup>阿弥陀仏<sup>一</sup>、即無<sup>二</sup>此難<sup>一</sup>。

と述べ、さらに『論註』卷下、主功德に

若人、一生<sup>一</sup>安樂淨土<sup>一</sup>、後時、意願<sup>下</sup>生<sup>二</sup>三界<sup>一</sup>、教化<sup>下</sup>衆生<sup>上</sup>、捨<sup>二</sup>淨土<sup>一</sup>、命<sup>下</sup>隨<sup>レ</sup>願<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>生<sup>一</sup>、雖<sup>レ</sup>生<sup>二</sup>三界<sup>一</sup>、雜生<sup>一</sup>、水火<sup>中</sup>、無上菩提<sup>一</sup>、種子、畢竟<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>朽。何以<sup>レ</sup>故<sup>一</sup>、以<sup>レ</sup>逕<sup>二</sup>正覺阿弥陀<sup>一</sup>、善住持<sup>一</sup>故。

と述べ、菩提心が淨土では不朽であるとしている。このように淨土において菩提心が生じさせられ、また淨土では菩提心が不朽であると云う考えを有する曇鸞にとっては、願生に際してあえて發菩提心を直接要求する必要性がな

かったと云えるのではないだろうか。

## 結 論

このように『論註』では菩提心が浄土において仏力により生ぜられると云う見解を示し、また菩提心の積極的展開を還相廻向にて捕えることにより、願生に際しての利他面を自己の功德を衆生に施すと云う消極的表現に止めて、願生に際しての発菩提心を直接積極的には要求しない。言い換えれば、これによって『論』そのものが願生者を五念門が修することの可能な高い機根として捕えるのに対して、『論註』が願生者を下品下生と云う低い機根を中心として捕えること（ここに現実の衆生を見出していた。）により生じた、願生者の機根についての『論』との相違と密接に係わる願生に際しての発菩提心の問題を解決していると云えよう。

従って善巧摂化において曇鸞が『無量寿経』三輩往生文の発菩提心を依用した意図は、発菩提心を願生者に積極的に要求したのではなく、浄土往生後に還相廻向として積極的な利他が展開されなければならないとの見解において、この利他をなす菩提心が還相廻向を行なうに先立って要求されるという点を闡明するためであると考えられる。即ち曇鸞の発菩提心の実質的要求は願生に際してではなく、還相廻向としての巧方便廻向に際してであると云えよう。云い換えるならば、往相廻向においては浄土への往生と云う眼前の目的が表面化し、成仏と云う究極の目的がその背後となったのと同様、往相廻向に際しての発菩提心の要求は、名号の称名・憶念の如実修行を内容づける「知<sub>二</sub>如来<sub>一</sub>是<sub>レ</sub>実相身<sub>二</sub>是<sub>レ</sub>為物身<sub>一</sub>」<sup>②</sup>及び信心の「淳<sub>一</sub>・一<sub>一</sub>・相統」<sup>③</sup>の問題の背後になつていとも云えるかも知れない。しかしこれは「信」の考察を通じて論及されるべきものであり、本稿ではこの点への言及はさしひかえ、別稿を期したい。

なお先述の善巧撰化に「若人<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>発<sup>ニ</sup>無上菩提心<sup>一</sup>（中略）亦当<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>往生<sup>一</sup>也。」とあるのは、曇鸞當時において貧欲に基づく願生者が存在したために、かかる者への警告であると推定される。即ち浄土とは自己のみの楽を受け<sup>⑥</sup>る場ではなく、積極的に自利利他が展開される場であることを強調していると考えられる。曇鸞當時に貧欲に基づく願生者が存在したと云う点への史料の考察も別の機会としたい。

このように浄土往生後において積極的に自利利他の展開がなされることを闡明するために菩提心を強調する曇鸞の姿勢は、彼が修学し、また『論註』にも多引される『大智度論』等が菩薩行について多くの記述をなしている点と深く係るものであらう。即ち曇鸞は下品下生と云う低い機根の者の往生を認める一方、浄土での還相廻向としての菩薩行を強調することにより、菩薩行を説く『大智度論』等に代表される当時の一般的な大乘仏教の上に浄土教を位置づけていると云えよう。このように曇鸞の『論註』における菩提心の強調は、曇鸞當時に盛行していた『大智度論』等の諸経論が多く菩薩行を説いていると云う点にその思想的背景を伺うことができると云えよう。

#### 註

- ① 『浄全』一・二五一下～二五二上
- ② 『浄全』一・一九～二〇
- ③ 『浄全』一・七～八
- ④ 『浄全』一・九
- ⑤ 『浄全』一・七
- ⑥ 『浄全』一・一九
- ⑦ 梵本において漢訳（支婁迦讖訳）の「発菩提心」に相当する箇所は中・下輩にはなく、上輩において「覺りに心をさし向け」と藤田宏達氏が邦訳されている（『梵文

和訳無量寿經、阿弥陀經』一〇八）箇所であらう。これによるならば「覺りに心をさし向け」ることは阿弥陀仏を思念して願生する上での必要条件とされているようである。

- ⑧ 『浄全』一・二三七下
- ⑨ 『浄全』一・一九六～一九七
- ⑩ 『浄全』一・二一九上
- ⑪ 同右
- ⑫ 同右
- ⑬ 『浄全』一・七

- ⑭ 『淨全』一・五〇
- ⑮ 『淨全』一・二三三四下
- ⑯ 『淨全』一・二三三四下～二三五下
- ⑰ 「外凡夫」を十信とする点は、竺仏念訳『菩薩瓔珞本業經』卷上に「過外一切凡夫行十信者」(『太正』二四・一〇一二上)、「十住以前一切凡夫法中發三菩提心。(中略)修行十信得入十住。」(同上、一〇一四中～下)とあり、十信を過外凡夫、凡夫とするから、外凡夫は恐らく過外凡夫の略であると思われる点に基づく。望月信享氏は『菩薩瓔珞本業經』二卷が梁以前の偽經であると判じている(『仏教經典成立史論』四七一～四八四)が、その存在は『出三藏記集』卷第四の失訳雜錄(『大正』五・二二下)に記されている点よりして、恐らくは曇鸞當時に存在し、曇鸞が「外凡夫」と記した影響を探索上で唯一の現存經論であると云えよう。従つて現時点では「外凡夫」を十信と考えてよいと思う。
- ⑱ 『淨信』一・二四五下
- ⑲ 『淨全』一・二四五上
- ⑳ 『淨全』一・二四五下～二四六上
- ㉑ この觀行体相の「下下品人」(同⑱)は『觀經』の下品下生を指す。八番問答所引の『觀經』は現行同經の「下品下生者」(『淨全』一・五〇)を「下下品生者」(同上、二三五上)とする点に基づく。
- ㉒ 『淨全』一・二四五上
- ㉓ 『淨全』一・二五〇上～下
- ㉔ 『淨全』一・二五一下
- ㉕ 『淨全』一・一九六～一九七
- ㉖ 『淨全』一・二五一下
- ㉗ 『淨全』一・二四〇上
- ㉘ 『淨全』一・一九六～一九七
- ㉙ 同右
- ㉚ 『淨全』一・二四六上
- ㉛ 『淨全』一・二五一下
- ㉜ 仏本所<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>起<sub>ス</sub>此莊嚴清淨功德者、見<sub>ユ</sub>三界、是虛偽相、是輪轉相、是無窮相、(下略)。(卷上、清淨功德『淨全』一・二二三下)
- 此三界、蓋<sub>シ</sub>是生死凡夫流轉之闇宅。(中略)統而觀<sub>ニ</sub>之、莫<sub>シ</sub>非<sub>ニ</sub>有漏。(下略)。(同右『淨全』一・二二三上)
- 從<sub>レ</sub>有漏心生、不<sub>レ</sub>順法性、所謂<sub>ニ</sub>凡夫人天諸善、人天果報。若因、若果、皆是顛倒。皆是虛偽。(卷上、造論意趣『淨全』一・二二二上)
- ㉝ 『淨全』一・二五〇下
- ㉞ 『淨全』一・二四七上
- ㉟ 『淨全』一・二五二下
- ㊱ 『淨全』一・二三九下～二四〇上
- ㊲ 『淨全』一・二三四下



③⑧ 『浄全』一・一九三

③⑨ 『浄全』一・二五二上

④① 『曇鸞の五念門釈——世親の五念門説との対比——』  
色井秀護著（『高田短期大学紀要』一・一〇下）参照。

④② 『浄全』一・二五二上

④③ 本節は④①の色井氏の論文に教えらるる所が多かった。

④④ 『浄全』一・二五二上

④⑤ 『老子』上篇、第七章に「天長地久。天地所以能長且

久者。以其不自生。故能長生。是以聖人。後其身而先。外其身而身存。非以其無私耶。故能成其私。」（傍点著者）と同様の表現がある。『大乘大義章』卷上、「次問真法身寿量并答」（『大正』四五・一二七上）には、菩薩について、

不得不成正覺。菩薩有二種。一者功德具足自然成仏。如一切菩薩。初發心時皆立過度言。我当度一切衆生。而後漸漸心智轉明。思惟寿量。無有<sub>二</sub>一<sub>一</sub>仏能度一切衆生。以是故諸仏得一切智。度可<sub>レ</sub>度已而取滅度。我亦如是。二者或有菩薩。猶在<sub>二</sub>肉身<sub>一</sub>。思惟分別。理実如此。必不得已。我当別自立願。久住世間。広与<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub>為縁。不得成仏。譬如<sub>二</sub>有人<sub>一</sub>。知一切世間皆歸無常。不可<sub>レ</sub>常住。而有<sub>二</sub>修習<sub>一</sub>寿業行。住<sub>二</sub>非有相非無相<sub>一</sub>。乃至八万劫者。又阿弥陀

等。清淨仏国。寿命無量。

とあり、衆生の救い得るもののみを救つて滅度に入ろうとするものと、久しく世間に住して衆生を救おうとするものがあることを明かしている。羅什は後者において淨土の菩薩を捕えているようであるが、曇鸞は「今言<sub>二</sub>速得<sub>一</sub>阿耨多羅三藐三菩提、是得<sub>二</sub>早作<sub>一</sub>仏也。」（『浄全』一・二五五上）と述べるごとく、衆生に先立つて成仏すると淨土の菩薩を考えているようである。

④⑥ 『浄全』一・二五四下

④⑦ 『浄全』一・二五四下～二五五上

④⑧ 『浄全』一・一九八

④⑨ 『浄全』一・二五五上～下

⑤① 第十八願を引き「縁<sub>二</sub>仏願力<sub>一</sub>故、十念念仏、便得<sub>二</sub>往生<sub>一</sub>。（下略）。」（『浄全』一・二五五下）

⑤② 第十一願を引き「縁<sub>二</sub>仏願力<sub>一</sub>故、住<sub>二</sub>正定聚<sub>一</sub>。住<sub>二</sub>正定聚<sub>一</sub>故、必至<sub>二</sub>滅度<sub>一</sub>無諸廻伏之難。（下略）。」（『浄全』一・二五五下）

⑤③ 第二十二願を引き「縁<sub>二</sub>仏願力<sub>一</sub>故、超<sub>二</sub>出常倫諸地<sub>一</sub>之行、現前修習普賢之徳。（下略）。」（『浄全』一・二五五下）

⑤④ この点に関して幡谷明氏は「如来の本願力廻向と菩薩の本願力廻向の即一性」（『浄土論註』昭和五十五年度安居次講 一四九）と述べている。かかる問題の詳細な考

は稿を改めて別の機会としたい。

54 『浄全』一・二五二下

55 『無量寿経論註の研究』藤堂恭俊著 一一九～一二〇参照。同氏の指摘の他に「如<sub>レ</sub>斯<sub>レ</sub>浄土、非<sub>三</sub>界<sub>一</sub>所撰<sub>二</sub>」(中略)蓋<sub>二</sub>菩薩別業所<sub>レ</sub>致耳<sub>一</sub>」(卷上、妙声功德『浄全』一・二二七上)、「安樂是菩薩慈悲正觀之由<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>。如来神力本願之所<sub>レ</sub>建<sub>二</sub>」(卷上、清淨功德『浄全』一・二二三上)、「安樂浄土、是無生忍菩薩淨業所起。阿弥陀如来法王所領<sub>二</sub>」(卷上、妙色功德『浄全』一・二二五上)が指摘されよう。

56 『浄全』一・二五二下～二五二上

57 『浄全』一・二四二上

58 『浄全』一・二二九上～下

59 『論註』、観行体相に『論』の「如<sub>レ</sub>彼<sub>レ</sub>摩尼如意宝性、相似相对法<sub>一</sub>。故<sub>一</sub>」(『浄全』一・一九三)を注釈して「彼宝但能与<sub>二</sub>衆生衣食等願<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>能与<sub>二</sub>衆生無上道願<sub>一</sub>」(『浄全』一・二四〇下)と述べ、摩尼宝性が無上道の願を衆生に与えないと述べているが、これは浄土が無上道の願を与えることを示唆するものである。徒つてこの無上道の願を菩提心と考えるならば、浄土で菩提心が生ぜられる一の証となろう。

60 『浄全』一・二四八上～下

61 『浄全』一・二四三下～二四四上

62 『浄全』一・二三八下

63 同右

64 『無量寿経論註の研究』藤堂恭俊著 一六～一八参照。

65 浄土が受樂無間であることは善巧摂化以外に、『論註』卷上、無諸難功德に「彼<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>身有<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>、而受<sub>レ</sub>樂無間<sub>二</sub>」(『浄全』一・二四四上)とある。しかし浄土の樂とは、名義摂対に妙樂勝真心の「樂」の字を注釈して「三者法樂<sub>二</sub>反<sub>一</sub>樂<sub>二</sub>反<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>智慧所生樂<sub>一</sub>。此<sub>レ</sub>智慧所生樂、從<sub>レ</sub>愛<sub>二</sub>三<sub>レ</sub>者<sub>一</sub>法樂<sub>二</sub>反<sub>一</sub>樂<sub>二</sub>反<sub>一</sub>。故<sub>一</sub>。勝言<sub>二</sub>起<sub>一</sub>」(中略)妙言其好。以此樂緣<sub>二</sub>仏生<sub>一</sub>。故<sub>一</sub>。勝言<sub>二</sub>勝<sub>二</sub>出<sub>三</sub>三界中樂<sub>一</sub>、(後略)。(『浄全』一・二五三下)と述べ、智慧所生であり、仏を縁として生じた三界の樂に勝出した樂と説かれているものと同一のものであると考えられる。従つて貪欲所求の樂と浄土の樂とは質的に相違すると云えよう。

※ 拙稿『論註』における菩提心について(『仏教論叢』第二八号)において、「願<sub>二</sub>生<sub>三</sub>彼安樂浄土<sub>一</sub>者、要<sub>二</sub>發<sub>二</sub>無上菩提心<sub>一</sub>也」(『浄全』一・二五二下～二五二上)なる文を「無三宝処の衆生に対して巧方便廻向の菩薩が示すものではないだろうか」(三九下)と述べたが、『論註』でこれを積極的に証することはできないので、本稿の結論をもつて訂正しておきたい。先学諸氏の御指導、御批判をいただければ幸いである。

(文学部研究科博士後期課程・仏教学専攻)